

---

# 紅き翼の神～蓬萊戯談(ハウライギダン)

香月遥乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅き翼の神ホウライギタン 蓬萊戯談

### 【Nコード】

N0321X

### 【作者名】

香月遥乃

### 【あらすじ】

極東の国、蓬萊国ホウライ。清王朝が華王朝に変わってから、優に九十五年以上経ったその国では、科学文明が発達していた。しかし、「神仙の住まう国」とされた伝説は、人々に秘密にされながら、現在も生きていた。

平凡な女子高生・芹口優万せりぐちゆうまは、突然部活を止めてしまった鳥羽亮介とばりょうすけの秘密を探ろうとする。そこには、驚くべき真実があった。『龍は微睡む』の外伝のようなお話です。

史実が関係する事はありませんが、100%ファンタジーです。悪しからず。他のサイトで投稿したものを、こちらでも載せさせていただきます。

## 第一話

世の中には、想像もつかない事がある。それを、わたしは思い知ったのだった。

- - - - -

西の神の子が人々の罪業を負うべくして生まれてから二千と幾ばくかの年月が過ぎた。

世界は今、科学技術が発達し、かつてないほどに文明が栄えている。

大陸の極東に位置する蓬萊国もまた、そうした先進国の内の一つだ。経済国家として成熟し、本国である中国よりも豊かである。

遙か昔から、中原の人々からは『東の蓬萊、西の崑崙』と並び称されるほどの神秘の国であつた蓬萊だが、現在は開かれた国として観光客も多い。

人々は、蓬萊国が神秘の国と言われていた事も忘れてしまつていた。

「練習始まるよー」

おみくらかな

友人の大倉香菜が声をかけてきて、芹口優万は我に返つた。いつの間にか、ホームルームは終わっている。教室にいる生徒の数はまばらだった。

「うん」

優万は慌ててうなずいて鞆を手にした。香菜は、ひょいと窓の外を覗いてにこつと笑った。

「あ、陸上部？ 鳥羽、いっつも練習くるの早いもんねー」

「ち、違っ…！」

「照れない照れない。もうバレバレだから」

香菜は、にやにや笑いながら優万を小突く。そう言われては反論はもはやできない。優万は、大きく溜息をついて、また窓の外を眺めた。

窓の外から見えるグラウンドでは、陸上部が早くも練習を開始している。その中で、黒いジャージに身を包んだ男の子が一人でアツプをしている。

三階からでは顔までよくわからないが、すらりと伸びた手足としなやかな体つきはわかる。

優万は、うつとりと見つめる。香菜は、そんな優万に呆れたようだった。

「優っちゃん、あんな無愛想なやつはどこがいいの？」

その言葉に、優万は香菜の方に体を向けた。

「どこって…、走ってるの、カッコ良くない？」

「いや、まあ、確かにあいつは走るの早いけどさ…」

香菜は、反論できずに頭を掻いた。ショートカットの髪の毛がひよひよと跳ねているのが可愛い。ちら、と窓の外を横目で見るので、優万も釣られてまたグラウンドに目を向けた。

香菜が、ぼそぼそと呟くのが耳に入る。

「だってさあ、鳥羽っていつつも一人でいるじゃん。友達いなさそうだし、無愛想だしさ…。根暗そうじゃん。もうちよつと愛想がよかったら、わたしだってとかく言わなくて済むのに…」

「それはもう聞きあきた。…練習行こっか、香菜ちゃん」

鞆を肩にかけて、優万は香菜に笑う。くるりと戸へと向かうと、慌てて香菜が追いかけてきた。

「あつ、待って待って！」

「ほら、置いてくよー」

教室を出れば、放課後の学校は閑散としていた。特に、明日から

夏休みとなれば尚更だ。

音楽室までの廊下は、日が射してうだるような熱さだ。窓も全開だが、風もない。

優万は、手でひらひらと自分をあおぎながら香菜に苦笑する。

「暑いねー、毎日。もうやんなっちゃう」

「ホント。教室だけじゃなくて、廊下にも冷房つけろっての」

「そうそう、そしたら快適なのにさあ」

他愛ない会話。部活に向かうまでのこの移動時間に、香菜と下らない話をするのが、優万は何よりも楽しかった。

優万の通う明鳳学園は、幼等部から大学院まであるこの地域でも大きい私立学園だ。学園内での交流は、それぞれの学校が近くになりからあまり活発ではないが、それでも一貫校だからそれなりにはある。九月に行われる学園祭もその一つだ。

優万の所属する合唱部は、幼等部、初等部、中等部、高等部、大<sup>学</sup>とそれぞれ歌を披露する事になっている。学園祭初日のとりを飾る事になっているので、部長や指揮者、伴奏者の意気込みはすごいものがあつた。もちろん、優万だって気合いは入っている。

本番で歌う西洋の讃美歌は何を言っているのか正直わからないが、曲そのものも荘厳で気に入っている。

今の合唱部にも楽曲にも何の不満もない。

「こんにちはー」

でも、と優万は音楽室に入って、ちらと窓の外を見やった。

窓の外には、文化部の部室が並んでいる。運動部の部室はまだグラウンドに近い場所にあるので、まだ向こうだ。優万には、それが気に入らない。

音楽室からは、グラウンドも運動部の部室も見えないのだ。鳥羽が走っているのが見られたら、どんなに嬉しいだろう。

鳥羽亮介<sup>とりはな</sup>。高等部からこの学園にいる優万とはちがい、初等部から学園ににいるという、いわゆる大きい家のお坊ちゃんらしい。しかし、だからといってそれを鼻にかけるようなところはなく、寡黙で

いつも一人でいる。

それだけなら、優万は気にも留めなかったかもしれない。

ある時、香菜に連れられて陸上部の大会に行った事があった。

そこで、優万は心を奪われてしまったのだ。

亮介は、まさにスターだった。

目の前を颯爽と風のように通りすぎた亮介は、優万の目にも美しく、陸上を愛しているのがよく伝わってきた。

それから、何かにつけて亮介を探して、追っている自分に気付いた。亮介の姿を見る事ができれば、一日幸せだ。

しかし、それ以上の行動には移そうとは思わない。優万の気持ちは、まだ幼いものだった。

「練習を始めるよ」

練習前のざわつきを静めるように、部長が手を叩いて大きな声を上げる。優万は、ハッと我に返った。

「今日も各パートで個別練習。最後の三十分で軽く合わせるよ。」

以上、練習開始！」

その言葉に、優万は香菜と一緒に女声高音ソプラノの面々が集まる窓の側へと向かった。主旋律を担当する花形だが、ソプラノは音域が高い分、きちんと発声練習をしないと綺麗に声が伸びない。

電子ピアノの前に陣どって優万は深く息を吸った。

高い声を出すのはさほどつらくはないが、優万は声量があまり大きくなかった。腹の底に力をこめて、口を大きくあけるのだが、それでもまだ大きな声でうたえない。

発声練習を終えて、音取りをしていた部員がポーンと曲の最初の音を取る。

「じゃあ、最初っからやるよ」

「はい」

思い思いに返事をして、改めて最初の音に集中する。

「さんはい」

主よ、憐れみたまえ。

西洋の神へと歌われるのは、凜と澄んだ、それでいて慈愛深い旋律だ。

優万の意識は、目の前の曲へとシフトしていった。

今日は、何だか声の調子が良い。優万は、嬉しくなりながら歌う。音楽室には冷房がある事はあるが、余程暑い時でなければつかな

い。

今日はまだそれほど暑くないと判断されているのか、冷房はついていない。窓は全てが開けられ、もわつとした熱気を伴った風を流れ込む。代わりに、合唱部が練習するバラバラな旋律が流れ出している。

一つにまとまっていない音楽は美しくない。周りからすれば、この合唱 いや、音楽関係の部の個別練習が一番迷惑だろう。優万は、いつも思う。自分がそう思うから。

しかし、この練習をきちんとこなさないと美しい音楽を作り上げる事はできない。皆が真剣だった。

個別練習の時間はあっという間に過ぎ、部活終了時間まで残り三十分になった。

部長が、再び手を叩いて声を張り上げる。

「そろそろ合わせるよ！」

皆、音楽室の中央に体を向ける。指揮者が、手を軽く構えて立っていた。

ぴたり、と静まり返る音楽室。

指揮者は、伴奏者と顔を見合わせてうなずくと、手をサツと降った。

その瞬間。

「待てよ、鳥羽！」

声を出そうとした瞬間に音楽室の外から怒鳴り声が聞こえて、皆、出鼻を挫かれて口を開けたまま、声の方を見やった。

優万は、聞こえた言葉にドキツとした。

声の方へと目を向けると、二人の男子生徒が揉み合っていた。更



に、優万は目が釘付けになる。

片方は、制服姿だが、どちらも陸上部だとわかる。必死に制服姿の男子　亮介を引き留めようとしている陸上部指定のジャージ姿の男子にも、見覚えがあった。

「ねえ…あれって、堀くんじゃ…？」

「うん。何やってんの？　こんなところで…」

ひそひそと隣の香菜に囁きかけると、香菜も応えてくれる。堀は香菜の彼女なのだ。秋になれば陸上部の部長になる二年の学年代表。面倒見の良い堀が、亮介と何を揉めているのだろう。

「鳥羽！　ちゃんと説明しろ！　どうして突然陸部辞めるなんて言うんだ！！」

「えっ…！？」

優万は、思わず小さく声を上げていた。

堀のその言葉は、まさに晴天の霹靂だった。

亮介が、陸上部を辞める。なぜ？

対して、亮介はいつもと変わらない平然とした顔だった。

「辞めるなんて言っていない。もう辞めたんだ」

「だからどうして…！」

「家の都合。そうだっただろう」

何を言っても暖簾に袖押しの状態だ。それが堀にもわかったのだろう。堀はぎりつと奥歯を噛み締めた。

「それじゃ納得できないつつてんだろ！　もつと詳しく話せ。学年代表の俺には、理由を知る権利があるはずだ！」

亮介は、堀の訴えにはまったく心を動かされた様子がない。

「だから、家の都合だと言っている。顧問はそれで納得してくれた」  
「顧問と俺は違う！」

堀は、ほとんど掴みかかりそうな勢いで亮介に詰め寄る。亮介は、うんざりしたように小さく息を吐いた。

「じゃ、納得してくれなくて結構。俺は忙しいんだ。帰る」

「鳥羽…！　陸上が嫌いになったわけじゃないよな？」

どうあつても今は亮介の真意を探る事はできないと悟ったのか、堀は少し落ち着いた声に戻って帰ろうと背を向けた亮介に問いかける。

鳥羽は、びた、と足を止めた。

「嫌いなわけがない。でも、もう…部活はできないんだ」

亮介は、堀に謝るように言うと、今度こそ立ち止まる事なく歩きさった。

残された堀は、しばらく亮介の後ろ姿を見送っていたが、肩を落として部室へと戻っていく。

優万は、それを呆然と見つめていた。

あまりに突然すぎて、全然信じられない。あんなに陸上が好きに見えた亮介が、陸上部を辞めてしまうなんて。

「…口さん、芹口さんっ！」

誰かに呼ばれている気がして優万がはっと我に帰ると、指揮者が怖い顔をして優万を睨んでいた。それで、優万は更に、今が部活中だという事を思い出した。

「あ…す、すみません」

「集中してくれないと困る。三十分しかないんだから」

指揮者は、優万を注意すると、ぐるりと皆の顔を見回した。優万のように上の空な人はいないか調べるように。

「よし。じゃ、始める」

改めて、指揮者は手をさっと振る。一瞬の静寂、大きく息を吸う音。

讚えよ、神を。

ピアノの伴奏に乗って、静かに美しい旋律が窓から流れ出す。

優万は、なかなか集中できなかった。おざなりではいけないと思うが、つつい意識は亮介の事へと飛んでいく。

ああ、気になる。

どうして亮介は陸上部を辞めてしまったのだろう。家の都合って一体どんな都合なのだろう。

どうしても訳が知りたい。

- - - - -

「…ごめんなさいね、亮介」

小さく呟いた人物に、亮介ははつと顔を上げた。

「いえ…。前から決まっていた事ですから」

亮介は、きつぱりと首を振る。その瞳に迷いはなかった。

だから、亮介の前に座っていた女は表情を改めた。

「そう。…ならば、もう言わないわ。亮介、私に力を貸してくれるわね」

「はい。もちろんです」

亮介は、神妙にうなずく。そんな彼を見つめていた女は、ふと唇を歪めた。

浮かぶのは、嘲笑うかのような笑み。

「…本当ならば、私の犯した罪なのなもの。私一人で何とかすべきなのでしょうけれど…」

「あなたのせいじゃありません」

はつきりと否定して、亮介は俯く。

「この責めを負うのはこちらです。あなたは何も悪くない」

「けれど…」

言いかけた女は、言葉を切った。これ以上続けたところで無意味だ。

「…その話はやめておきましょう。とにかく、一刻も早く見つけなければならぬわ」

「はい」

女は呟いた。

「時間は少ししか与えられていない。お互い、全力を尽くしましょう」

亮介は、一瞬だけ遠い目をしたが、ゆっくり、大きくうなずいた。

## 第二話 その1

亮介が陸上部を突然辞めたというニュースは、大々的ではないながらも確実に周囲に広がっていた。

話の出所は、大半は堀と揉めているのを目撃した合唱部と陸上部だった。勿論、今は夏休みだから、授業がある時ほど話が広がっている訳ではない。しかし、それでも確実に広がっていく。

それほど、亮介は知られた存在だったのだ。

陸上部の鳥羽亮介と言えば、入部してからこの方、ずっとインターハイの常連だったのだ。そんな人間が突然陸上部を辞めるとなれば、ある意味、学園全体の問題とも言えた。

なのに、騒いでいるのは生徒だけだ。教師も、学園側も、亮介が陸上部を辞めるのを止めもしなかったという。

『顧問は納得してくれた』

亮介が何気なく言った言葉はおそらく真実だ。優万は、それが何よりも納得できない。

どうして誰も彼も亮介が陸上部を勝手に辞めるのを許しているんだろう。

「優っちゃん、厳しい顔しすぎ。こわーい」

グラウンドを何とはなしに見つめていた優万に、香菜が笑いながら声をかけた。優万は、香菜の方を向く。

「そんな怖い顔してた？」

自覚していない優万の発言に、香菜はわざとらしく大きなため息を吐いてみせた。

「そりゃあもう。グラウンドを睨み付けたって、鳥羽は帰ってこないよ」

「睨んでない」

「睨んでたよー！ まあ、気持ちはわかるけどね。愛しの鳥羽の姿をこっそり見つめる事がもうできないんだもん」

香菜がからかうように言うので、優万はじろりとねめつけた。

「香菜ちゃん、傷心のわたしを慰めるとかないわけ」

言っと、香菜はにっと笑ってみせた。

「だって、振られたわけじゃないじゃん。たかが部活辞めただけでしょ。確かに、鳥羽は陸上部のエースだったけど、どっか行っちゃうわけでもないじゃん」

それから、香菜はいらずらっぽく優万を見つめた。

「あ、それともなに？ わたしに構って欲しかったの？ 優っちゃんったら寂しがり屋さん」

「ちがーっ！」

優万は即座に抗議する。それから、堪えきれずに笑い出す。それを見て、香菜も少し安心したように笑い出した。

くすくすと小さな笑い声が窓から外に流れていく。

今日も暑い。じっとしていると、うつすら汗が吹き出してくる。

優万と香菜は、部活の昼休みを教室で取っていた。音楽室は今日は冷房が効いて快適なのだが、何せ皆が音楽室で思い思いに休憩を取るにはスペースがない。

暑い、教室が一番気兼ねなくおしゃべりができて楽な場所ではあった。

優万は、窓の外のグラウンドを見下ろしながら呟く。

「あーあ、わたし、これから何を支えに生きてけば良いの」

「大袈裟だなあ」

苦笑しながら、香菜はお弁当の最後の一口を食べる。

「だってー、わたし、鳥羽くんが走ってるの見えるだけで満足だったんだもん」

優万は、食べ終わって蓋をした弁当箱をコツコツと指で叩く。

前は、学校に来て陸上部が部活さえしていれば亮介の姿を見る事ができたというのに、亮介が辞めてからはもう何日も姿を見る事ができないでいる。まして、今が夏休みなら尚更だ。優万のストレスは相当溜まっていた。

香菜は、そんな優万に呆れたようだった。

「そんな事言ったって、鳥羽が陸部辞めたってのは紛れもない事実なんだから。今さらあーたこーだ言っても仕方ないじゃん」

「それはそうなんだけどさ…」

優万は、唇を尖らせる。

香菜は、しばらく優万の顔を見つめていたが、不意にニヤツと意地の悪い笑みを浮かべた。その香菜の顔を見て、優万は思わず仰け反った。

嫌な予感がする。

「…優っちゃーん。鳥羽には毎日会えなくなっちゃったって事はあ、神様からのお告げだって」

「お、お告げ？」

気味の悪い香菜の言い方に、優万はへっぴり腰になりながら訊き返す。

香菜は、にっこりと微笑んだ。

「そう。お告げ」

優万の目をしっかりと見つめる瞳は、思っていたよりも真剣だった。

優万は、引き込まれる。

「優万に、見てるだけじゃなくって、もっと行動しろって言うてるのよ」

「ええ？」

優万は、信じられずに間拔けな声を上げていた。

「そんなのできないよ」

「それじゃあ、諦めるわけ？」

「それは嫌！ だけどさ…」

香菜の意地悪い問いかけには即答したが、優万は情けなく俯く。このままじゃ駄目なのはわかっていて。けれど、何をどうすれば良いのかわからない。今の自分に何ができるかもよくわからなかった。

そう思って、改めて気付いた。

自分は、亮介の事を何も知らない。彼の走る姿に夢中すぎて、基本的なプロフィールすらもちゃんと知らなかったのだ。

「香菜ちゃん、わたしさ……」

さっきまでとは違う優万の顔付きに、香菜は、なに、と訊いた。

「鳥羽くんの事、もつとちゃんと知りたい。これまで、あんまり知りたいと思わなかったけど、やつぱり……」

このまま何も知らないままじゃ駄目な気がする。

そう言くと、香菜は目を見開いた後、微笑んだ。

「そうよ、このままじゃダメ。……ってか、優万ちゃん、鳥羽の事何にも知らないで好きになっちゃったの？」

改めて香菜に訊かれて、優万はちよつと頬を赤くした。

これまで疑問にも思っていなかった事だったが、人にそう突っ込まれると恥ずかしい。

「……そうなの……。悪い？」

優万が上目遣いで恨めしそうに言っていると、香菜は慌ててぶんぶん首を振った。

「悪くない、悪くない。……でも、優万らしい」

「なにそれ、抜けてるって言いたいのか？」

拗ねて優万が言っていると、香菜は弁当箱を片付けながら答える。

「優万ちゃんは中身をちゃんと見てるのね、ってこと」

はぐらかされたような気がしないでもないが、香菜は至って真面目だったので、本気かもしれない。優万は、ここまでにして話題を元に戻す。

「まあいいや。……鳥羽くんの事って、どうやって調べたら良いんだろう？」

考え込んだ優万に、香菜はあつけらかんと答えた。「とりあえず、手始めに堀から話を聞いてみる？」

「え……？」

優万は、ぽかんとした。

香菜は、にっこり笑う。



「鳥羽が陸部辞めた理由が知りたいんでしょ？」

「う、うん」

「それもまた、『知る』って事よ」

「確かに……」

香菜は、目から鱗が落ちたような顔をしている優万に笑いかけて、時計に目を向けた。

「ついでに鳥羽のプロフィールも手に入れちゃいませよ。……さ、時間だし、音楽室に戻ろっか」

時計は、十三時五分前を指している。午後の練習は十三時からだ。優万も、席を片付けて教室を出た。

ふと、香菜を見れば、携帯電話でメールを打っている。堀に、亮介の事で話を聞きたいと早速アポを取っているのだろ。なかなか行動が早い。

ありがたいと思いながら、優万の心は亮介の事へと飛んでいた。今、亮介は何をしているのだろ。何を考えているのだろ。

合唱部の練習が終わったのは、三時だった。本番が近くなればもう少し長く練習をするが、まだ本番まで間がある。

優万は、ぐったりしていた。

「午後から不調だったね」

香菜が、慰めるように声をかけてくる。

午後からの練習で、優万は注意散漫で全然なっていないかったのだ。女声高音のリーダーには何度も注意され、集中しようとして音を何度も外してしまった。

それより堪えたのは、周りの冷たい目だった。部員は皆気の良い人間ばかりだが、今日の優万は、やろうとすればするほど空回ってしまうのが、周囲から見れば、やる気のないように見えたのだろ。合唱への熱意は人一倍な人間が集まっているから、今日の優万は

許せなかったに違いない。事情を知っている香菜以外の冷たい目に曝され、優万は心身共に疲れていた。

「だいじょーぶ？」

「だ、大丈夫…。注意散漫だったわたしが悪いんだし」

優万は、がつくりと落とした肩もそのままに、香菜にひらひらと手を降ってみせた。

香菜は、ふう、と息を吐いた。

「なら良いんだけど。でも、大分疲れてるように見えるよ？ 堀と会つの明日にしようか？」

「大丈夫！ てか、明日にしないで！ 決意固めとしてこのままなんて生殺しだから」

すがり付くように言う優万に、あはは、冗談、と笑ってからグラウンドに降りる階段をたたたと降りる。

明鳳学園の高等部は学園の中でも高台にあるから、校舎がグラウンドよりも少し高い場所にある。そのため、グラウンドに行くには、短い階段があるのだ。

陸上部は、まだ練習をしていたが、グラウンドに降りてきた香菜たちに気付いた一人が顔を上げた。

「香菜ちゃん、今帰り？」

気安く声をかけてくるのは、おそらく先輩だ。香菜は、にこっと笑った。

「はい。終わるまで見学してて良いですか？」

「良いよ良いよ。香菜ちゃんなら大歓迎。 堀！ 彼女来てるぞ

！！」

先輩は親しげに笑ってから、大きな声で堀を呼んだ。砂場で砂をならしていた堀が顔を上げて香菜を認めた。

「あれっ、合唱部もう終わった？」

駆けてきてかけられた言葉に、香菜が答える。

「うん。今日は早い日だし」

「そうなんだ…。まだ練習あるんだよなあ、待てる？」

堀は、優万の方を見てから訊く。優万は、うなずいた。

「大丈夫。そこら辺で見学させてもらうし」

「じゃ良かった。退屈かもしれないけど」

「そんな事ないよ」

その言葉を聞いて、香菜がにやりとする。

「またまたあ、心にもない事を。鳥羽がいない陸上部、優万にとってはつまんないだけじゃないの？」

「香菜ちゃん！」

流石に堀の他の部員がいる前で言う言葉ではないだろうと名を強く呼んで咎めたが、先輩はあっけらかんとしたものだっただ。

「あ、鳥羽のファン？ そう言う事かー。だから、堀に話聞きたいって？」

「そういう事なんです」

香菜は、にっと微笑んだ。優万はついていけない。

「先輩は何か知ってますか？」

香菜が訊くのに、先輩は大きく首を振った。

「いや。急に『辞める』ってそれっきり音沙汰なし。もあさーっぱり訳わかんないよ」

肩をすくめてみせる先輩に、優万は沈む。同じ陸上部でも、知らないようだ。

「理由とかもわかんないんですか？」

堪らず口を挟んだ優万に顔を向けて、先輩は申し訳なさそうな顔をした。

「無口なヤツだからなあ……」

それは、暗にわからないと言っていているに等しい言葉だった。優万は、「そうですね」とうなずくしかなかった。

「多分、そこら辺は、やっぱり堀が一番詳しいと思うぜ」

「わかりました。…じゃ、練習の邪魔してしまってますみません。わたし達、邪魔にならないようにしてますので。行こ、優っちゃん」  
「うん。お邪魔しました」

優万もうなずき、すつと二人はグラウンドの隅まで退いた。ポツンと据えられたベンチにカバンを下ろして、腰掛ける。

「上手くいきそうね。後は、堀の話次第、ってとこかな」

「そうだね。詳しく知ってれば良いんだけど」

ベンチは、上手い具合に木陰になっていて、風が吹けばそれなりに涼しい。

優万は、久々にみる陸上部の練習風景に、違和感を覚えていた。何も変わらない。そのはずなのに、妙に何かが足りない気がするのだ。

その足りない者が、亮介である事に、一瞬遅れて気付く。無意識に、亮介の姿を探してしまっていた自分にも気付く。

そう言えば、亮介が辞めてから陸上部の練習を見学するのも久しぶりだった。

「じゃ、今のうちに推理しとく？」

香菜がにつと口の端を吊り上げて優万の顔をのぞき込んできた。優万は、首をかしげる。

「推理？ 何を？」

香菜は、呆れたように大袈裟に息を吐いた。

「もう、優っちゃんはそのが駄目なのよ。考えなきゃ」

「考える？」

「そう。確かに、誰かに話を聞くのは大事。だけど、自分でも何が原因なのか考えてみなきゃ。いつも鳥羽を見てた優っちゃんなら、案外堀にも誰にもわからない事に気付くかもよ」

香菜はそう説明して、いまだにぼかんとしている優万に訊いた。

「ずばり、優っちゃんは、鳥羽が陸上部を辞めた原因って何だと思ってる？」

「考えるとは、その事か。」

優万は、ようやく納得したが、香菜の問い事態には首を振る。

「そんなのわかんないよ」

## 第二話 その2

「ほら、また諦める！ ちょっとは考えなよ」

香菜に言われて、優万は考えてみた。

亮介が陸上部を辞めた理由。

そういえば、本人は辞める時に『家の都合』とは言っていなかったか。

「家の都合、とか…」

ははは、と誤魔化した優万に、香菜が鋭く質問してくる。

「それは、優っちゃんの考えじゃなくて、鳥羽が言ってた事じゃん。それとも、優っちゃんは本当にそう思ってるわけ？」

そう言われて、優万はつまった。

あの時の亮介には、迷いはなかった。

亮介の表情を思い出しながら、優万はゆっくりと考えている事を口に出す。

「…うん…。鳥羽くんが言ってたのは、嘘じゃないと思う。でも

…」

「でも？」

「何か、家の都合っただけが理由だけじゃないような…気がする」

香菜は、小さく首をかしげる。

「どういう事？」

「家の都合なら、いかにも無理矢理辞めさせられましたって感じになるじゃない？ でも、鳥羽くんはそんな風じゃないように見えた。まるで、…そう、自分の意志のようなものを感じた」

優万の言葉に、香菜は更に首をかしげる。

「意志？ そりゃ、部を辞めるってのは自分の意志なんだろうと思うけど」

香菜の言葉に優万はつまったが、小さく息を吸ってから続ける。  
「意志っていうか…自分が辞めなくちゃいけないっていう使命感？」

みたいなもの？ そんな感じがしたの」

「優っちゃんの言ってる事、なんかよくわかんないなあ」

香菜は、首を左右に捻りながら、呟く。

「うん。わたしも言ってるてよくわかんない」

優万は、苦笑しながらペットボトルの蓋を開けた。

「何よお、優っちゃんも言ってるてよくわかんない事をわたしに話してたの？」

「えへへ、ごめん」

優万は、膨れた香菜にいたずらっぽく言った。こくつと一口お茶を飲んで、優万は遠くを見る。

「…今、鳥羽くん何してるんだろう」

「さあね。案外、彼女と遊び歩いてたりして」

しれっとした香菜のともでもない言葉に、優万は愕然とした。

「そ、そんなのいないよー！」

香菜は、意地悪そうに笑う。

「それはどうかな？ 知らないだけなんじゃないの？」

「…う…。それは、…そうだけど」

途端に落ち込んだ優万を見て、香菜は吹き出してから優万に抱きついた。

「もう！ 優っちゃんったら可愛すぎー！ 冗談だつて」

からかわれて、優万は怒ってみせる。

「香菜ちゃんヒドーイ！」

「ごめんごめん」

香菜は、笑って謝る。これは単なるじゃれ合いなので、交わす言葉には深い意味はない。

ないはずだ。

なのに、香菜が言った『彼女と遊び歩いてるかも』という可能性だけは、妙に優万の心にしこりを残した。

それから、亮介の話から逸れて他愛ない話をしている内に陸上部の練習は終わり、堀がジャージ姿のまま二人のいるベンチにやって来た。

「お待たせ」

「ううん。じゃ、どつか場所移そっか」

香菜は、堀が近付いてくると勢いよく立ち上がり、堀と優万にこつと笑いかけた。

正直なところ、暑くて堪らないから、場所を移動したいというのがある。優万に否やはなかった。

三人は、高校を出てすぐにあるファミレスに入った。冷たいものが飲みたかったただけなので、ドリンクバーだけ頼んで、ひとまず落ち着く。

「大倉から話聞いた。俺に聞きたい事があるんだって？」

優万はうなずいたが、違和感を覚えて首を捻った。それから、それを口に出す。

「…大倉…？ 二人ってさ、付き合ってるのに名前呼びあつてないの？」

「えっ！？」

予想外の変化球に、香菜と堀は同時に素っ頓狂な声を上げていた。「な、何を言い出すの…！？」

顔を赤くして口をパクパクさせる香菜は、優万から見てもちよつと可愛かった。

優万は、なぜかからかってみたくなって、にやりと笑ってみせる。

「んー？ 二人とも、お互いの名前知ってるよねえ？」

「……っ！！」

更に顔を赤くして黙る二人。そんな二人を優万はにこにこ笑って黙って見ていた。

妙な沈黙。

一瞬置いて、優万はあっさり二人を解放した。

「…そんな事より、今日はごめんね。急に鳥羽くんの話聞きたいな  
んか言い出して」

堀は、目に見えてほっとした顔で答える。

「いや、良いよ。俺も、誰かに聞いてほしかったし」

「そう、じゃあ良かった。でも、色んな人に訊かれたんじゃないの  
？」

訊くと、堀は意外な事に首を振った。堀自身も意外だと言わんば  
かりだ。

「それが全然。噂にはなってるけど、俺には全く誰も話を聞きには  
こないんだよなあ」

「そうなんだ」

優万も、意外で相槌を打つと、横から香菜がしたり顔で口を挟ん  
できた。

「噂の出所って、あの時の現場に居合わせた合唱部の部員じゃん。

部活中で状況が状況だったし、鳥羽の事はニュースだけど、堀の事  
までは記憶になかったのかもよ？」

ああ、と堀は納得した。

「合唱部って、本当に練習熱心だもんな」

「皆合唱バカなのよ」

香菜は呆れたように言う。そういう香菜も、もちろん優万も合唱  
バカの類に入るのだが。

「しかし、アレを見られてたなんて全然気付いてなかったよ。あ  
の時はいつぱいいつぱいだったし」

堀は、見られていた事を恥じるように頬を掻いた。

こうして話して接していると本当に堀は穏やかな少年なのだ。あ  
の時、亮介に怒鳴っていた事の異常さがわかる。

「あの後、結局鳥羽くんから理由訊けたの？」

優万の質問に、堀はさっと顔を曇らせた。

「いや。捕まらなくてさ……」

「捕まらない？」



その話は香菜も初耳だったのだろう。聞き返す。

「ああ。憎らしい事に、辞めたあの日までに部室の荷物を全部片付けててさ。休み中だから学校には現れない。メールも電話も応答なし。家も知らないし、もうお手上げだよ」

大きくため息を吐き、両手を挙げて堀は肩をすくめてみせた。

優万はなんとなく「やつぱり」と思っていた。

亮介の退部に彼自身の辞めようという強い意志があつたのなら、そうなって当然だ。特に、理由を訊かれるとわかっていて姿を現したり、連絡が取れるようにはするはずがない。

「だから、このタイミングで辞めたんじゃない？」

優万の言葉に、香菜と堀は優万の顔を見つめた。二人に見つめられて驚くが、優万は続けて根拠を話す。

「だってそうじゃない？ 次の日から休みつて時に辞めたら、自分から接触しない限り、あれこれ訊いてくる人たちには会わないで済むでしょ」

「そっか」

当たり前といえばよくわかる理由に、香菜は納得する。堀は、納得こそしたものの、何か釈然としないものがあるようだった。

首を捻りつつ、半ば独り言のように呟いた。

「でもさ、まさか自分の誕生日に辞めなくても…」

そのふと耳に飛び込んできた衝撃の単語に、優万は大きな声を上げていた。

「誕生日！？」

あまりに大きな声だったから、周りの席に座っていた人たちが一斉に優万たちに視線を向ける。

優万は、顔を赤くしてうつむいた。が、すぐに堀に真剣な顔を向ける。

「あの日、鳥羽くん誕生日だったの！？」

堀は、優万の迫力に気圧されたように体を引いてうなずいた。

「う、うん。プロフィールは把握してるし、間違いないよ」

優万は、考えこんだ。

やっぱり、何かがおかしい。

一つ一つを見れば偶然の積み重ねにすぎない。しかし、何かおかしいと優万は感じるのだ。

急に辞めたくせに、前から辞める準備をしていた亮介。

その亮介が辞めたその日は自分の誕生日。

そして極めつけは、インターハイの常連だった亮介が辞める事であつさりと認めた顧問、理事会だ。

亮介が好き勝手に振る舞い、それがある程度周りの大人に許されているという事も、どこか変だ。

「ねえ、優っちゃん？」

黙りこくってしまった優万を心配そうに香菜が覗きこんでくる。

優万は、努めて微笑んだ。

「なに？」

「大丈夫？」

「大丈夫大じよ」

優万は笑って返事をしようとして、凍りついた。窓の外を見つめたまま、動けなくなる。

その目線を追って振り向いた香菜と堀は、優万の目が釘付けになっているものを見て、思わず声を揃えて叫んでいた。

「鳥羽っ！？」

そこにいたのは亮介だった。優万たちのいるファミレスとは道路を挟んで向こう側にあるコンビニの前だ。所在なさに立っている。

「何で、こんなところに」

堀が呻くように呟いた。ここは、まだ学校から近い。

今、『鳥羽は学校の近くには現れないだろう』と言っていたところだ。まさか、そんな矢先に現れようとは。

亮介は、優万たちが見ているとは全く気付いていない。コンビニの中をチラチラと気にしながら、誰かを待っているようだ。

不意に、コンビニから目も覚めるような美女が出てきて、亮介に

駆け寄った。長い黒髪で赤い清服のようなデザインの服を着た、一見してただ者ではないとわかる雰囲気的美女だ。

彼女が亮介に微笑みかけると、二人は歩き出した。ちらっと見えた亮介は、珍しい事に微笑んでいた。

優万は、その光景に釘付けになっていた。見たくないのに、目が離せない。

どうしてこんな所にいるんだろう。それよりも、一緒にいる美女ひ一体何者なんだろう。亮介との関係はどういうものなんだろう。

優万の頭の中はそんな疑問で渦巻いて、亮介がもう目の前からいなくなった事にも気付かなかったくらいだ。

「…ちゃん、優っちゃん!? ちょっと、大丈夫!？」

香菜の呼びかける声が随分大きくなっていた。優万は、はっと我に返る。

「あっ…、うん。大丈夫」

「ほんとに? ヒドイ顔してるよ?」

優万は、そう言われて嘘を吐くのを諦めた。

「うん…。ちょっと何か…、訳わかんない」

このもやもやした気持ちはどう表現したらいいのかわからない。ショックで、苦しくて、混乱している。

『彼女と遊び歩いてるかも』

グラウンドで香菜が言っていた言葉がなぜか頭の中をぐるぐる回っていた。

あの美女は、亮介の彼女なんだろうか。だったら、あんな美しい人には到底敵わない。

香菜は、未だに呆然としている優万を見て、これはまずいと慌てたようだった。優万を何とか浮上させようと、わざと話題をずらすとする。

「優っちゃん、明日の練習午後からだってわかってる?」

「え…、うん。…ねえ、鳥羽くんと一緒にいたのって、あれって…彼女かな…?」

「え…」

香菜は、せっかく話題をずらそうとしたのに元に戻されて言葉に詰まる。香菜自身は、優万に冗談めいて言った事などすっかり忘れていたのだ。

困って堀をちらりと見やるが、堀は、優万よりも困惑しているようだった。

香菜は、優万に困ったような視線を向けながらも、真剣な眼差しで言う。優万自身は自覚していないが、どれだけ本気なのかはよく知っているのだ。

「…さあ、わかんない。随分仲良さそうではあったけど。堀は何か知ってる？」

優万と同じくショックを受けていた堀は、香菜に振られてはっと我に返った。

「あ、いや。全然。兄弟はいないらしいし、親戚…とか」

堀の慰めともつかないような言葉だったが、香菜は待つてましたとばかりに食い付いた。

「それぞれ、親戚かもよ。だって、明らかに年上じゃん、あの人。

それに、あんな美人じゃ鳥羽には勿体ない」

慰めてくれているはずなのに、優万は亮介をけなす香菜の発言についついむっとしてしまう。

「勿体なくないよ」

「はいはい。じゃ、あの人は彼女なのね」

「っ」

ずばつと切り返されて、優万は何も言えなくなる。香菜は、優万が言葉を失った事に笑った。

「ごめんごめん。鳥羽のくせに優っちゃんの心を弄んでるのがイラついてさ。優っちゃんをいじめるつもりはなかったの」

それがわかってから、優万もうん、とうなずいた。

香菜が、グラスの中のストローをぐるぐるとかき回す。からん、からん、とグラスが音を立てた。

優万を見ながら、彼女は立ち直ったようだった。

「で、これからどうするの？」

「これ…から？」

きょとんと優万は香菜を見つめる。香菜は大きくうなずいた。

## 第二話 その3

「そう。これから」

「うん。堀くんから話聞いたら、まっすぐ帰るつもりだけど」

「はあっ!？」

香菜は、優万のとぼけた発言に呆れて大きな声を上げた。

「もう、ちよっと。しっかりしてよ。勝手にシヨック受けてたって、何にも変わらないんだから」

「えっ…、ああ、うん」

優万は、ようやく香菜の質問の意味がわかってうなずいた。実は、本当に何も考えずに答えただけだったが、それを言えば今度は天然ボケと言われるだけだ。それがわかっているので、優万はこれ以上弁解しなかった。

「…どうするって言っても…どうしよう?」

香菜は、待つてましたとばかりに瞳を輝かせた。

「まずは、あの美人の正体を探るのが先決よ」

優万は、うん、とうなずいたが、すぐに首をかしげた。

「でも、どうやって?」

その疑問に、香菜は堀に顔を向ける。

「堀、さっき、鳥羽の家は知らないって言ってたよね?　じゃ、知ってる人っていないの?」

自分にはもう関係ない話だと、コーラを飲みながらぼんやり話を聞いていた堀は、急に話を振られて目を丸くした。

「へ?　鳥羽の家?」

「そう」

「…そうだなあ。誰だろう?　そもそもいるのかなあ。鳥羽、秘密主義だから」

優万は、それを聞いてますます興味をそえられる。

おそらく、一番近いと思われる堀でさえ知らないのだ。知って

いる者などいるのだろうか。

「でも、学校の近くだったと思うよ。鳥ヶ丘とりがおかの辺りだって聞いた事ある」

「鳥ヶ丘っていったら、大学の裏手にある一等地じゃない？」

香菜が、記憶を辿りながら言うのに、堀はうなずいた。

「そうそう」

「鳥羽くんの家って、お金持ちなんだったよね」

優万の言葉にも、堀はうなずく。

「確かな。詳しくは知らないけど」

香菜は、確信したように一人うなずいている。

「鳥ヶ丘だったら、すぐそこじゃない。優っちゃん家からもそんなに遠くないでしょ」

「そうだね」

「しばらくさ、張ってみようよ」

とんでもない事を、香菜は言い始めた。優万は、何の事かわからずにはしばらくぼかんとしたが、意味がわかった途端、香菜の顔を凝視してしまった。

「香菜ちゃん、本気？」

「本気本気。だって、そうでもしなきゃ鳥羽の秘密には辿り着けないじゃん」

笑っている香菜の目の奥は、笑っていなかった。優万は、意外にも香菜が真剣な事に驚く。

「香菜ちゃんって、そんなに鳥羽くんに興味あったっけ？」

何気ない疑問に、堀が妙な顔をする。香菜は、堀の表情を見てちょつと慌てたが、すぐに答えた。

「別に。ただ、あんまり隠されると、探りなくなっちゃうだけ」

ああ、と香菜の性格を嫌と言うほど知っている優万は納得した。

自分の知りたい事は、どんな事をしてでも知りたい。隠されれば隠されるほどに知りたくなる。香菜の前で、秘密は厳禁だった。

「でも、優万だって、知りたくて知りたくて堪らないくせに」

まあね、と優万は苦笑するしかなかった。

当然の乙女心だ。

もう、優万はためらわないと決めた。傷つこうがなんだろうが、亮介の事を少しでも知りたい。

それに、亮介自身が謎に満ちている。正直、気持ちが悪かったとしても、香菜と同じく知りたくなっていただろう。

「でも、張るって、どこで？」

驚いただけで、実際のところ、優万も乗り気だった。香菜に聞けば、彼女はにやっと笑った。

「大学の正門はどう？ あそこなら、鳥ヶ丘に入る一番の通り道だし」

「そっか。あの人、大学生っぽかったもんね。中国からの留学生かも」

ようやく思考し始めた優万が、納得して答える。香菜はうなずいた。

「そうそう。優っちゃんも考えてるじゃない」

「もちろん。ボケーっとしてたって真実は掴めない、でしょ」

優万と香菜は笑い合う。

一方、堀は、二人の間で決まった話に入り込めなくて、焦っていた。

「なに？ 二人とも、本当に鳥羽の事調べるつもりなのか？」

「うん」

優万と香菜は揃ってうなずいた。堀は、一瞬ぼかんとしたが、すぐに立ち直った。

「俺もやる！」

「え……」

「堀くんには関係ないよ？」

優万の言葉に、堀は詰まったが、香菜の顔をキツと見つめる。香菜は、怯んだ。

「そんなの、大倉にだって関係ないだろ」



「わ、私は良いの。だって、鳥羽の正体には興味をそえられるもん。それに、優っちゃんが変な男に引っ掛からないか、見張ってないと心配」

少し言い訳めいて聞こえるのは、気のせいではない。実際に、香菜が亮介に興味を持ったのは事実だろう。しかし、だからと言って、堀が心配する必要は全くないにと、優万はおかしく思う。香菜がどれだけ堀が好きというのはよく知っている。

「もう、香菜ちゃん。私、そんなに子供じゃないよ」

優万は、膨れてみせる。

「でも、一人じゃ不安でしょ」

香菜に凶星を指されて、優万はうなずくしかなかった。

見抜かれている。

「だったら、俺だって一緒にやるよ。俺だって、鳥羽が陸部辞めた理由は気になるし」

堀も横から口を挟む。そこまで言われては、もう優万は何も言えなかった。

「ありがとう」

「じゃ、三人ね。時間は、今くらいが良いのかなって思うんだけど、香菜が、テキパキと決めていく。二人に否やはなかった。

「それで良いんじゃない？ 現に、今日鳥羽を見つけたわけだし」  
ぐいっとグラスを飲み干して、堀が賛成する。

「じゃ、また明日この時間に、だね」

三人は、明日の約束をして別れた。

- - - - -

優万の家は、高校から歩いて二十分の所にある。

学園全体から見ると、一番西の中部に近い。しかし、高等部は北東にある。高等部に行くだけなら学園内の道を通つ切つて行くのでそれほど遠いとは感じないのだが、学園の中を通らなかつたら、ぐるりと遠回りをしなければならぬので少し遠い。

アパートの前にある公園で小学生が遊んでいるのを横目で見ながら、優万はアパートの階段を二階まで上る。

「ただいまー」

優万は鍵を掛けてから声をかけた。台所から、母が返事をしてくる。それを聞いて、優万は自分の部屋に行った。

「今日、ちよつと遅かつたんじゃない？」

着替えてから、台所に向かうと、母が夕飯の用意をしながら声をかけてきた。

優万は、冷蔵庫を開けて冷えた麦茶を飲みながら答える。

「そう？ 香菜ちゃんと話し込んでたからかな。あ、明日からちよつと遅くなるかも」

「なに？ 部活？」

母の何気ない問いにぎくりとしながらも、優万は努めて何でもない風を装つて答える。

「それもあるけど。香菜ちゃんと部活終わってから一緒に勉強するの」

「あら、本当？」

母の反応に、優万はまたぎくりとする。

「ほんとだよ。早目に課題終わらせたいもん。だったら、一緒にやった方が早いじゃん」

「そんな事言つて、一緒にいたら結局はかどらないんじゃないの？」  
鋭い母の指摘に、優万はムキになる。

「そんな事ないもん」

「そう？ それなら良いんだけど」

反論してから気付く。

これで、夏休みの課題が終わっていかなかったら、確実に疑われる。帰りが遅くなる上に、課題もハイペースで進めなくては。

墓穴を掘ってしまったかもしれない。

悔やんでも、もう遅い。

優万は、これからの夏休みを考えて、心の中で大きなため息を吐いた。

「今日のご飯なに？」

切り替えて、優万は母の手元を覗く。

「またそつめんなのお？」

手抜きも甚だしい、と憤慨して言った優万を、母はねめつけた。

「ご飯が食べられるだけありがたいと思いなさい」

「はあい」

適当に返事をして器を取りに行く優万に、母が今思い出したと言のように声をかけた。

「あ、そうだ。遅くなるんなら、道に気をつけなさいよ」

「えっ、何で？」

これまで遅くなる事があっても何も言わなかった母だけに、優万は不思議そうに聞き返した。母は、存外真剣な目をしていた。

「買い物に行った時にちよっと小耳に挟んでね。変質者が出てるみたいなのよ」

「ここら辺で？」

「ううん。でも、優万の高校の近くの……ああ、ナントカってファミレスあったじゃない？ その辺って。優万、あなたの行動範囲内なんだから、気をつけなさいよ」

「はい」

返事をしながら、優万は一瞬、亮介の事を思い浮かべて首を振った。

「どうしたの？」

「何でもない」

馬鹿らしい。どうして、変質者、高校の近くのファミレスで亮介

の事が浮かぶんだろ。何にも関係がないはずなのに。  
でも。

優万は、夕飯の準備の間中、その事ばかりを考えていた。

### 第三話 その1

次の日の午後四時。

優万と香菜と堀の三人は、高校の正門の前に集まっていた。

「じゃ、行こつか」

今日もノリノリの香菜がにこりと笑って言う。三人は、学園のギリギリ境界線を行くように歩き始めた。

優万は、歩き始めてすぐに昨日母に言われた事を思い出した。

「あつ、そう言えば、この辺、最近変質者出るんだって」

「えっ、そうなの？」

初耳という顔をする香菜に対して、堀の方は聞いた事があつたようだ。身に迫ってはいないから、全くの他人事のような口調で同意する。

「俺も聞いた。詳しい事は知らないけど」

「お母さんに気をつけるように言われたんだけど、どんな変質者がわかんないって言うんだもん。それじゃあ気をつけられないって」

優万は、母の事を思い出して、つつい口を尖らせて言う。しかし、香菜が食いついたのは、そこではなかった。

「どんな変質者かわかんないんだ」

「うん、そう。まだ会った人もそんなにいないらしいし、多分、気を付けなきゃいけないほどでもないんだろう」

堀の説明に、香菜は「ふうん」と納得した。

今の世、科学文明が発達して、闇はほとんどなくなった。しかし、その分人の心の闇は深くなった。ニュースや新聞を見れば、世界中のいたるところで心の闇に勝てなかった人々が毎日のように報道される。そして、それは優万たちも自覚している。

つまりは、変質者など、珍しくもないどこにでもある話なのだ。

実際に自分が遭遇するか、被害に遭うまでは、結局は他人事にならざるを得ない。

だから、この話題はすぐに変わって、三人の頭から消えた。

「そっぴやさ、俺、今日気になって色々調べてみたんだ」

「何を？」

「鳥羽の事」

そう言つて、堀は思い出すかのように少し遠い目をした。

「あんまりにも何にも知らないから、もうちよつと詳しいプロフィールがわかんないかと思つてさ。芹口さんへのお土産にもなるし」

「うん。ありがとう。…それで？」

優万が促すと、堀は妙な顔をした。

「それが…変なんだよなあ」

優万と香菜は顔を見合わせる。

「どういう事？」

「誰も、知らないんだ」

「？」

堀の言っている事がわからないので、二人は不思議そうに首をかしげる。堀は、噛んで含めるようにゆっくりと説明する。

「鳥羽の事だよ。陸部にも幼等部からいて、鳥羽と同じクラスになった事あるヤツとかいるんだけどさ、全く知らないんだ」

堀は、自分も不思議でたまらないというように首を捻る。

「家がセレブらしい事と、無愛想な事、鳥羽の事で知ってる事つつたら、それくらいなんだとさ」

キヨロキヨロと亮介の姿を探しながら、堀は続ける。

「家も知ってるヤツいないって話だし、友達もない。…あと、顧問に聞いたら、意外な事教えてくれた」

「なにに？」

「鳥羽、高等部に入るまで部活やった事なかったんだって」

堀のこの言葉には、さすがに二人とも驚いた。

「まさかあ！」

大袈裟に香菜が否定してみせると、堀は神妙な顔をしてうなずいた。

「いや。そのまさか。陸上は高等部に上がってから始めたらしい。おまけに、期限付きで」

「期限？」

「そう。陸部に入るように無理に勧めたのは顧問らしいんだけど、そしたら、鳥羽なんて言っただと思う？」

「何て？」

「『いつでも辞めたい時に辞めていいと許可してくれるなら、やってもいい』って」

優万は、ようやく腑に落ちた。

亮介が陸上部を辞める事を顧問が全く止めようとはしなかった理由がわかったのだ。最初にそんな約束をしていたというなら、いくら辞めさせたくなくても認めるしかない。

しかし、依然として疑問は残る。

「でも、変だよ。どうして鳥羽は期限なんてつけたの？ 最初っから途中で辞める事がわかってるみたいじゃん」

香菜の言葉に、優万も大きくうなずく。

「うん。顧問も、聞いたらしいんだ。そしたら、鳥羽は何も答えなかったけど、次の日に理事長から陸上部に入りたいんなら鳥羽のいう事を聞くようにって命令されちゃったんだって」

「えっ、理事長！？」

意外な大物の登場に、思わず優万は大きな声を出す。

教師と違って、普段全く接点がない役職の人間だ。そんな人物と、亮介が結びつかない。

「ちよつと、おかしくない？ そもそも、鳥羽はたかが一生徒よ？ これまでだって、理事会が生徒のために出ばった事なんてなかったのに、なんで鳥羽の時ばかり口を出してくるの？」

「そうなんだよなあ。顧問も、聞いたんだって。そしたら、『聞くな』って」

堀は首を振り振り、どうしようもないと答えた。

香菜は、更に興味をそそられたように目を輝かせる。

「なんでそんなに隠すんだろ？ 怪しいって言ってるもんなのに。優っちゃうん、これは絶対に何かあるよ」

優万も大きくうなずく。

亮介が隠す事と理事長が隠す事、何か接点はないのか。

そう考えて、優万はふと思い出した。

「そういえば、理事長の名前って、鳥羽って言わなかったっけ？」

二人は顔を見合わせる。

「あ、そうだったっけ？」

「なんだあ、身内？ だから介入してきたのね」

口々に納得するが、それと亮介の謎は別。亮介は姿も形もないし、謎は深まるばかりだ。

そろそろ大学の正門に着く。

門の反対には、閑静な住宅街だ。一等地である。どの家も庭まできちんと整えられて美しく、道にはゴミ一つ落ちていない。

優万は、自分の家の近所と比べて、思わずため息を吐いた。

「あーあ、こんなとこに住めたら良いのに」

「金持ちってずるいよねー」

香菜と愚痴る。

今の生活に不満はない。しかし、この閑静な住宅街のどこかに亮介が住んでいるのかと思うと、何だかとても羨ましく思えた。

「…鳥羽君、どこにもいないね」

正門の前にしばらく佇み、周囲を見回して他愛ない話を募らせて、ポツリと優万は呟いた。

香菜と堀はハツとした顔を優万に向けた。優万自身が思っているよりずっとがっかりした声をしていたらしい。

「ま、こんなところろつろしたりはしないさ」

「そうよ。もう少し向こうに行ってみよう」

口々に優万を慰めるように言い、香菜と堀は移動を提案する。

確かに、一箇所に留まっているよりも、住宅街を巡ってみた方が遭遇率は高いかもしれない。



「そうだね」

優万が乗り気になったので、二人もホッと胸を撫で下ろす。

ふと、香菜が何かを思いついたかのように目をキラッとさせた。

「どうせなら、鳥羽ん家探さない？　ただダラダラ鳥羽を探すのももったいないじゃん」

「それ、良いかも！」

亮介に言いたい事のある堀は大賛成だ。もちろん、優万にも異存はなかった。

謎が多い亮介。家がわかる事で、その謎が少しだけでも解明できたら良いのに、と優万は考える。そうすれば、少しだけ距離が近くなる気がするから。

三人とも、そう簡単に亮介の家がわかるわけないとはわかっていた。しかし、大学の正門前で明らかに高校生と見られる三人組が何をするわけでもなく駄弁つていたら、やはり目につく。

「まず探すんだったら、鳥が丘でしょ」

「じゃ、そっちから探そうか」

どこをどのようにして探すか、三人で意見を出して、次のようになった。

亮介の家があると噂される鳥が丘中心に探す。

人がいれば、鳥羽という家について聞いてみる。

鳥羽の家がわかった場合、そこに妙齡の美女がいなか探りを入れる。

最後の項目に関しては、優万は最初は難色を示したが、香菜に押しきられた。

まあ、元々はその美女が発端だ。優万も、美女の事が気になっていたから、難色を示したというのも恥ずかしいという思いから出たにすぎない。香菜に押しきられた時点でその思いはなくなった。

鳥が丘は、一等地だけあって綺麗に整備され、大きな邸宅が並ぶ閑静な住宅街だった。

表に立派な表札が掛けられている家も多く、三人はその表札を一

軒一軒確かめて歩いていった。

人がいれば、鳥羽家について尋ねてわかれば終わりなのだが、いかんせん人がいないものは仕方がたい。どうして人がいないのだろうと思ひながら、優万は目の前の家の表札をチラと見やつた。

もちろん、鳥羽ではない。

がっかりしながらも、足早に門の前を通りすぎた時。

「わあっ！」

いきなり門がすごい勢いで開き、小太りの女が出てきた。

「なにしてるの、あなた達？」

着ているものはあくまで上品なブランドもの。さすがに、鳥が丘の奥様は違ふ、と優万は頭の片隅で思う。

家々を嘗めるように歩いていったのが不審で問いただしに出てきたらしい。

「えっ、と……」

咄嗟には何も説明できないでいる優万を押し退けて、香菜が女へと身乗り出す。

「あの、この辺りに鳥羽って家ありませんか？ 友達が風邪引いたって言うんでお見舞いに行こうと思ったんですけど、迷ってしまつて」

「あら、そういうこと」

女は、あっさり納得した。香菜は、優万と堀を振り替へつて、女にわからないようにべえと舌を出してみせた。三人にとつてはみえみえの嘘なのだが、女にはいたつてもつともな理由に聞こえたらしい。

堀は苦笑している。優万は、香菜の機転に舌を巻いていた。

私もこんなふうには咄嗟の機転がきくようになればいいのに。

女は、機嫌良く答える。

「鳥羽さんの家？ あなた達くらいのお年のお子さんがある家だったら、多分あのお屋敷じゃないかしら。あのお屋敷よ、白い塀と大きな門のあの古い大きな」

女が指差した所を見て、三人は思わずポカンとした。

それは、女が言う通り家ではなく　屋敷だった。

今優万たちのいる通りの突き当たりはその屋敷はあった。白塗りの汚れ一つない純蓬萊風の壁。木でできた大きな門。いかにも江戸時代の武家屋敷といった風情だ。

女は、優万たちの驚きようを笑いながら続ける。

「大きなお屋敷でしょう？　この辺りでも一番大きなお屋敷なのよ。なんでも、秦始皇の時代からある名家なんですって」

女の言葉には、三人は更にポカンとするしかなかった。

次元が違う。

三人は、確かにそう思っていた。

本当に亮介の家なのだろうか。

「確か、そのお屋敷の二番目の息子さんかしら。あなた達と同じくらいだったはずよ。お名前は…そう！　亮介君、だったかしら」

間違いない。あの大きなお屋敷が、亮介の家なのだ。

「鳥羽君って、本当にセレブだったんだね…」

優万は、呟く。

何だか、どんどん亮介との距離が開いている気がする。住む世界が全然違う事に気後れをする。

「優っちゃん、大丈夫？」

呆然としたまま現実に戻って来られない優万を心配して、香菜が声をかける。

大丈夫、とは言えなかった。

人の間に物理的な壁はない。けれど、今、優万は亮介との間に分厚く高い壁があると認識していた。

その壁に近付こうとすると、その壁はどんどん厚く高くなる。どうやってその壁を崩せば良いのかわからない。

「さすがに、あんな大きな家　てか、屋敷じゃなあ…。ちよっとショックかも」

無理もない、と堀は優万に同情気味だ。優万とは多少感情は違う

ものの、大きな壁を亮介に感じたのは事実だ。

しかし、二人とは違って、亮介に特別な感情を微塵も持っていない香菜は別だ。興味津々で二人の腕を引っ張る。

「ねえ！ 早く行こうよ」

「えっ!？」

そんな事は思いもよらなかった優万と堀は大きな声を上げる。

教えて下さってありがとうございましたと、と香菜は女にペコリと頭を下げて、なお二人の腕を引く。

「ちよつ、ちよつと、香菜ちゃん！」

優万が慌てると、香菜はちらつと優万を振り返る。

「なに？ 行くの止める？ 優っちゃん」

「…っ、そうじゃないけど」

意地の悪い香菜の問いかけに、優万は一瞬詰まってから首を振る。

「ないけど、何よお」

唇を尖らせて、香菜は言葉を濁らせた優万を促す。

「ちよつと…気後れしちゃって」

「そんな必要ないわよ。どんなに家が大きかったって、鳥羽は鳥羽でしょ？ 家なんて関係ない」

「いやまあ…そうなんだけど」

性格オトコマエだなあと思いつつも、優万はうなずくしかない。しかし、香菜のおかげで踏ん切りはついた。

### 第三話 その2

それでも、大きな門の前まで来て、しばらく三人は戸惑ってしま  
った。

門が大きすぎて、どこにインターホンがあるのかわからない。

「……あら？」

まごまごしているうちに、涼やかな声がかけられた。それから、  
聞き覚えのある声。

「……堀？」

三人は、振り返る。

「鳥羽っ!？」

「あの時の美女!」

「鳥羽君?!」

三人三様の声に、美女は苦笑し、亮介は困惑したように眉をし  
めた。

「何で俺の家の前にいる？」

まずは、その質問が投げられるだろう、と、誰よりも先に反応し  
たのは堀だった。

「鳥羽に訊きたい事があって、それで探してた」

その言葉に、亮介の顔が歪む。

「俺に？ なにを？」

「陸部を辞めた事、忘れたとは言わせない。俺は、今も納得してな  
いんだからな」

「でも、もう過ぎた事だ」

「そうだけど、俺は納得できないんだ! ……鳥羽は、陸上が好きで  
好きでたまらなかったはずだ」

堀が問い詰めている間中無表情だった亮介の顔が、最後の呟きで  
大きく歪んだ。その顔を見てしまった美女が、はっと息を呑む。

優万も、その表情を見て狼狽えた。

それは、亮介が初めてみせた後悔の表情だった。

「…もう、言うな」

小さく、亮介が呟く。その声には、聞く者を黙らせる強い思いがこもっていた。

しかし、堀が今更引くはずがない。

「いや、言わせてもらう。お前は陸上を愛してたはずだ。俺にだってそれくらい、見ればわかる。でも、お前は陸上を辞めた。それもあっさり。…どうしてだ？ お前にとって、陸上はそんなに軽いものだったのか！？」

「…それは」

亮介は、言葉に詰まった。堀の言葉が堪えているのだろう。

沈黙が降りた。

ふと、美女が何かを決意したように顔をあげた。

「…それは、私のせいなの」

「違う！」

亮介は、美女を振り返って叫んだ。

美女は、小さく首を振る。それから、優万たちを微かな憂いを含んだ美貌を向けた。

この美女は、一体何者なのだろう。

「こんな所で立ち話もご近所迷惑ね。…亮介。続きは中でしましよ  
う」

「でも」

洩る亮介に、美女は爽やかな笑みを浮かべてみせる。

「せっかく来てくれたお友達を無下にするものではないわ。それに、  
亮介も私も、この人たちに説明する必要があるはずよ」

「友達じゃ…」

亮介は反論しかけて、美女の強い視線に言葉を呑み込んだ。

逆らえないらしい。

珍しい光景に、三人は啞然とした。ますますこの美女が何者なのか気になってくる。

結局、亮介が折れて、門の脇についていた扉を開けた。まず、美女を家に入れてから、三人を振り返る。

また、亮介は無表情に戻っていた。

「入れ。特別だからな。ヒオウが入れるって言わなかったら、絶対に入れなかった」

「あの人、ヒオウって言うんだ」

香菜が感心したように言うと、亮介は、はつとした顔をした。教えなくても良い事を口にしてしまったと言わんばかりだ。

優万は、さっきからの亮介と美女のやり取りが頭から離れなかった。

仲の良さそうな二人。それに、二人は互いの事を名前で呼びあっている。

亮介は、大きく息を吐いて、気を取り直したように続けた。

「とにかく、説明できる範囲で説明する。入れ」

亮介が家の中に入るように更に促す。三人は、それぞれ複雑な思いを抱えて鳥羽家に入った。

屋敷の敷地内は、外見からの予想を裏切らない武家屋敷だった。

しかし、それは見た目だけで、玄関に一步入れば、中は、至って現代的なフロアリングの廊下だった。

「恵子さん、いるか？」

玄関で靴を脱ぎながら、亮介は誰かを呼ぶ。

しばらくして出てきたのは、四十くらいの上品な着物姿の女性だった。亮介を見るなり、にこにこ笑みを見せる。

「ヒオウ様、ぼっちゃま、お帰りなさいまし」

「ただいま、恵子さん」

「ただいま」

亮介にしては丁寧に返事をして、三人を振り返る。

「客だ」

恵子と呼ばれた女性は、三人を見て更に満面の笑みを浮かべた。見ているこちらが驚くような嬉しそうな笑顔だ。

「まあ、珍しい。ぼっちゃまのお友達ですか。それはまあ」

「友達じゃ……」

改めて反論しようとした亮介だったが、また美女に口を挟まれる。「そうなのよ、恵子さん。珍しいでしょう？　夏休みだから、遊びに来てくれたらしいの」

「だから友達じゃ」

「亮介。そんな言い方失礼でしょう。せっかく暑い中会いに来てくれたのに」

「……」

重ねて美女にたしなめられ、亮介はむすっと拗ねたように黙った。三人は哑然とするばかりだ。

家に恵子と言う家政婦がいるのもびつくりだが、亮介が『おぼっちゃま』なんて。おまけに、無愛想な亮介のこんなに豊かな表情を拝めるとは。

恵子は、にこにここと三人を招き入れた。

「お上がり下さいまし。後でお部屋にお飲み物をお持ちしますね」

「いや。俺の部屋じゃなくて、南の座敷に持ってきてくれるか」

「あら、お友達なのにお部屋にお通しなさいんですか？」

意外そうな顔をする恵子に、亮介はまた文句を言いそうになったらしく、一瞬口を開いたが、すぐにため息を吐いた。

文句を言ってもまたたしなめられるだけだと気付いたのだろう。

「話があるんだ。だから、南の座敷を使う。今は誰も使っていないだろう？」

「ええ。では、すぐにお持ちしますね」

亮介の気持ちなどまるでわからずに、恵子はあっさり言って下がった。

「じゃあ、どうぞ」

美女がにつこり笑って三人に上がるように促す。その物慣れた様子に、三人は顔を見合わせる。

玄関を上がつてすぐにある畳の間に、三人は通された。軽く十六



畳はあるだろう。亮介の言っていた南の座敷とは、ここ的事らしい。座敷の真ん中にあつた長方形の木の卓に座る。東側に亮介と美女、西側に優万たち三人だ。

卓に座ると同時に、西側の障子が開いて恵子がお盆を片手に入ってくる。冷えたオレンジジュースとクッキーの類だ。それぞれの前にジュースを置き、最後にクッキーを卓の真ん中に置いてにつこり笑う。

「このクッキー、美味しいんですよ。是非食べてくださいね」

「あ、ありがとうございます」

それぞれ頭を下げる三人を、恵子はお盆を胸に抱えてながら見つめる。しかし、亮介が咳払いをして、はっと我に返った。

「では、ごゆつくり」

とん、と小意気味良く障子が閉まり、座敷には五人だけになった。

「さて、と」

一口ジュースを飲んで口火を切ったのは、香菜だった。ぐるりと四人を見回す。

「私は鳥羽の問題とは無関係だから、私が話を進めるね。良い？」

「ああ」

亮介は、優万を見て一瞬不思議そうな顔をした後、うなずいた。

優万は、わからないように香菜をにらんでいた。

亮介は、今の香菜の言葉に、どうして一番無関係なはずの優万がいるのかを不思議に思ったに違いない。香菜は堀の彼女だ。この中で、本当に無関係なのは、香菜ではなく優万なのだ。

しかし、それを今指摘すればやぶ蛇になる。

「まず…紹介してくれない？ この人はだれ？」

香菜は、美女を見ながら訊いた。

「私は」

「俺の口から言います」

自分から名乗ろうとした美女を制す。亮介は、一片の迷いもなく言った。

「このひとは孫<sup>そんひ</sup>緋凰。俺の遠い親戚だ」

亮介の言葉を額面通り受け取っていいものかわからない。

「親戚？」

「そう。…本土の方の」

「じゃ、中国人なんだ」

今時蓬萊にいる中国人なんて、蓬萊人と半々だ。珍しくもなんともない。

緋凰はにっこりと笑う。

「人を探しているの」

そう言った時に、緋凰の顔が艶<sup>つや</sup>つぱい憂い顔になったのに、優万と香菜はいち早く気付いた。

いや、それは女の勘と呼ぶに相応しいものかもしれない。

二人は、視線をちらつと交差させた。

「それって…」

「探してるのって、これですか？」

香菜が、くいつと親指を立ててみせた。

亮介がハッと顔色を変えるが、訊かれた当の緋凰はポカンとした顔をしていた。

「これって、なあに？」

「いや、何って…」

少し抜けた様子に、香菜は完全に毒気を抜かれたらしい。

優万が代わって答える。

「彼氏って事です。緋凰さん、彼氏を探してるんですか？」

「彼氏？」

またしても、緋凰は不思議そうな顔をする。それから、答えを求めるように亮介に顔を向ける。

亮介は、苦り切った顔をしていた。

「彼氏は、恋人の事です。…二人とも、勝手な推測は止めてくれ。

緋凰の彼氏なんかじゃないんだから」

緋凰の無言の質問に答えて、亮介は優万と香菜に向き直る。

しかし、緋凰はあつけらかんと言った。

「あら、二人の推測は正しいわよ。…あの人は、私を愛していたし、私も…あの人を愛しているわ」

そう言った緋凰の瞳は、なぜか遠かった。

「緋凰」

亮介が固い声で言う。緋凰は、黙ってその瞳を見つめていたが、チラッと三人を振り返って唇を歪めた。

「嘘を吐くなんてできないわ。本当の事じゃない」

「……」

亮介も、三人を振り返って黙った。

どうやら、これ以上は三人に触れられたくない事らしい。

「その人が…行方不明なんですか？」

優万は、恐る恐る尋ねた。

その問いに、亮介も緋凰も顔を曇らせた。

「そう…。わからないの。わからなくなってしまった…」

「この街にいる事は確かなんだ。鳥羽家所領の邸のどこかに…。それが、どの邸なのかわからないし、もしかしたら、外に出てるかもしれない。早く探さないと…」

「亮介」

半ば独り言のように、亮介は呟く。それを制したのは、今度は緋凰だった。

ハッと、亮介は口を閉じる。

「その人って、鳥羽の親戚なの？」

秘密の匂いを嗅いだ香菜は、興味津々だ。

「……」

亮介は、香菜が知りたくてうずうずしているのに気付きながら、口をつぐんだ。

「…なによお。いいじゃん。話してくれたんだから、全部教えてよ」

痺れを切らした香菜は、唇を尖らせて拗ねたように言った。複雑

な状況を読んだ堀が隣から名を読んで止めようとするが、それくらいで止めるような香菜ではない。

「鳥羽ってば！」

「……ごめんなさいね。これ以上話すと、私も亮介も怒られてしまうわ」

見かねて緋凰が口を開く。そう言われてしまうと、香菜も無理強いでできなくなってしまった。

「仕方ないわねえ」

「家に関わりある事は、話せないんだ。変だと思いかもしれないが、それが三千年以上続いている鳥羽家のしきたりなんだよ」

亮介も隣から説明する。緋凰には、申し訳ないという表情があったが、亮介は相変わらず無表情だった。しかし、緋凰ほどこきたりの事を不快には感じていないようだった。

「変なの。そんなに家が大事なわけ？」

秘密を探り当てる事ができなかった香菜は、口が悪くなっている。「香菜ちゃん！ 今のはさすがに言い過ぎ」

見かねて、優万は口を挟んだ。亮介の前で緊張している自分より、香菜や堀が話を聞いた方がずっと話が早く進むと思ったので、これまで黙っていたのだが、香菜の見下すような物言いには堪らなくなつた。

優万の強い声に、香菜はハツとしたようだった。無自覚だったらしい。

「ごめんなさい。言い過ぎた」

素直に頭を下げた香菜の謝罪を、亮介も緋凰も受け入れる。

「…良いのよ。私も、今の時代には古いしきたりだと思うから」  
「でも、必要なんだ」

亮介は、きつぱりと断言した。そう断言するには、根拠があつての事に違いない。亮介は、古いしきたりを是としているようだった。「…さて、私の事が聞きたかったわけではないのでしょうか？ 話が脱線してしまつたわね」

沈黙が降りたのを良い事に、緋凰は話題を変えた。しかし、緋凰の事を聞きたかった優万たちは、目的をほぼ達しているとも言えた。「じゃ…話を戻す」

堀が、口をひらく。亮介は、どこまで話が戻るのか察しがついて、不機嫌そうに目を細めた。

「俺は、鳥羽が陸部を辞めた理由を知りたいんだ。さつき、緋凰さんは、それは『自分のせい』だと言った。まず、それから訊きたい。それは本当の事なのか？」

「…ある意味では本当だ」 亮介は、ポツリと呟いた。

### 第三話 その3

「ある意味？」

間髪入れずに香菜が訊き返す。

亮介は、チラッと緋凰を見てから続けた。

「…緋凰の探し人は、俺だけじゃなく鳥羽家にとっても探しているひとなんだ。必ず、探し出さなければならぬ」

確固たる口調で言うてから、ふと、亮介は微かに苦しげな顔をした。

「でも、それがなくても、俺は十七歳になったら陸上部は辞めなければならなかったんだ」

「どうして」

「それが兄さん　鳥羽家当主と陸上部に入るための約束だったからだ」

三人は、目を丸くした。

香菜は、考え方が古いという顔を隠せないでいる。優万も、そう思う。

当主の考えに従わなくてはならないとか、友人にも家の事はみだりに話してはならないなど、百数年前の世のようだ。

そんな優万たちの気持ちは、亮介にとってはよくある事のように。亮介は微かに唇の端を歪めた。

「理解はしなくていい。多分、理解できないだろうし」

「…どうして、お兄さんは十七歳で辞めるなんていったんだ？」

「　　本当なら」

堀の質問に、ポツリと亮介が口を開く。

「…本国での成人　十八歳までは大丈夫だったんだ。でも、俺の時は特別だった」

亮介は、緋凰をちらつと見る。皮肉げに笑う緋凰に黙って首を振る。

「特別って？」

「またもや、香菜が我慢できずに訊く。亮介は、香菜をじっと見つめた。」

「思わず香菜が怯んでしまうような、強い目だった。横で見ていた優万はどきりとする。」

「これ以上は、鳥羽家に関わる問題だ。訊かないでくれ」

「あ…、はい」

「亮介に吞まれて、香菜はおとなしくうなずくしかなかった。」

「とにかく、これでわかってもらえたか？ 堀」

「……」

「まだ納得できていない、そんな顔をした堀に、亮介はしれっと訊く。しかし、堀にとっても、ここまで訊くのが限界だった。」

「すでに、人様の家の事情に片足を突っ込んでいる。訊くなど言われてしまつては、納得できていなくても、黙るしかなかった。」

「亮介は、能面のように無表情な顔をしている。じっとその顔を見つめている内に、優万は、その中に亮介の本心を見た気がした。」

「堀君。もう、訊かないであげようよ。鳥羽君も、陸上が嫌いで辞めたわけじゃないんだし。これ以上問いつめるのは可哀想」

「芹口…」

「堀が、驚いた顔をする。ある意味で一番知りたがっていた優万が、あつさりと引き下がるとは思わなかったのだ。」

「優万は、更にうなずく。」

「…わかった」

「堀は、「芹口が言うのなら仕方ない」と引き下がった。」

「その様子に、亮介は目を見開いた。」

「優万の言葉は、亮介の心情を理解している。それが、亮介にもわかった。」

「しかし、だから腑に落ちない。どうして、これまで話した事もない優万に自分の気持ちかわかるのか。」

「緋凰は、につこりと優万に微笑みかけた。」

「亮介は誰よりも優しいから、私のせいだとは言えないの。ありがとう。これ以上亮介を責めないでくれて」

「いえ……」

優万は、小さく首を振る。

亮介が優万の気持ちに気付かないのとは逆に、緋凰は全てを見通しているようだ。

それが、優万を落ち着かなくさせる。緋凰の美貌を見ると、まるで女神の前に裸でいるような頼りなさを覚えるのだ。

ずず、と出されたジューズを音を立てて啜った香菜が、唐突に口を開いた。

「あのさ、緋凰さんって、鳥羽とどういう関係なの？」

改めて訊かれた二人は、咄嗟に答える事ができずに固まった。

優万は、慌てて香菜をつつく。

「さっき親戚だつて言ってたじゃん」

「優っちちゃん、そんなの本当に信じてるの？」

優万は、詰まるしかなかった。

優万だつて、この二人の親密そうな会話や雰囲気を見ていれば、亮介が言っていた『緋凰は遠い親戚』という言葉がいかに疑わしいか気付く。

「緋凰さんって、一体何者？ 遠い親戚なんていうわりには二人とも仲良さそうだし。孫なんて名字、どこにでもあるじゃん。本当の名字、なんて言うの？」

香菜は、意外に鋭いところを突いている。

しかし、香菜の疑問を聞いている内に、二人は表情を取り戻していた。

亮介は、凜とした曇りない顔をし、緋凰は、聞き分けのない子供をたしなめるような苦笑を浮かべる。

「緋凰は、遠い親戚だ。緋凰の世話を、一番近い俺がしているだけだ」

「私の名字は、孫よ。皇帝と同じ」



「だから、それが嘘くさいって」  
香菜が畳みかけようとするのを、緋凰がにっこり笑って封じ込める。

「ね。そういう野暮な事は訊かないでちょうだい。それで、私と友達になってくれると嬉しいわ」

「う……」

花が咲くような笑みに、さすがに香菜もそれ以上の追及を諦めざるを得なかった。

「緋凰！ 友達なんて」

「駄目よ、亮介。それはあの人……絳四郎と同じ」

亮介は、ハツとした顔をした後、唇を引き結んだ。苦いような、自嘲がつかの間浮かぶ。

緋凰は、三人にいたずらっぽく片目を瞑ってみせる。

「過保護で困るわ。もうこどもじゃないのに」

軽い雰囲気の後押しされて、優万はおそろおそろ口を開いた。

「あの……絳四郎さんって、行方不明の彼氏さんですか？」

緋凰は、優万の言葉に目を見開いたが、楽しそうに呟く。

「彼氏……。そう、彼氏ね」

彼氏という蓬萊語がお気に召したらしい。

「どんな人なんですか？」

「……そうね。亮介によく似た、優しいひとだったわ」

亮介は、緋凰の言葉に苦虫を噛み潰した顔をしている。

「緋凰。それ以上は」

またしても緋凰の言葉を遮ろうとする亮介に、緋凰は苦笑する。

「そんなところもそっくり。特に、私を束縛しようとするところとか……」

「ヒ・オ・ウ……」

亮介は、大きな声で叫んだ。緋凰はペロリと舌を出してみせたが、誰も笑う者はなかった。

束縛という言葉に、優万も香菜もドン引きしていたのだ。

束縛男など、今も昔も流行りはしない。そんな男とこの稀な美女の緋凰が付き合っていて、更には、その男が行方不明なんて。

「あのー、何でそんな人を探してるんですか…？」  
「は？」

優万は、更に恐る恐る質問をしたが、その言葉は意外にも亮介と緋凰にとっては突拍子もないものであったらしい。

ふたりはポカンとした顔をした。優万は呆然とする。

「緋凰さんの彼氏って…その…緋凰さんを束縛、してたんでしょ？それがどんなものかわかんないですけど…そんなひどい人…緋凰さんを捨てた人を探してるのは、なんですか？」

優万の言葉を聞いてきたふたりがハッとした顔をする。

「…いろいろ誤解があるようね」

緋凰が、ポツリと言ったが、何がどのように誤解なのかは言おうとはしない。ただ、哀しそうな顔をしていた。

「絳四郎…さんは、鳥羽の一族の人間だ。だから探している。俺の方はそれ以外にない」

亮介は、きつぱりと言う。

なるほど、それなら納得できる。

しかし、それにしては亮介は機嫌が悪そうだし、緋凰は絳四郎の事を今でも想っているようだ。ふたりの表す感情は正反对で面白い。

優万たち三人は、煙に巻かれてしまっていた。

「これでいいか？」

説明はもう充分だろうと、決め付けるように訊いてくる亮介に、一応は訊きたい事は訊いてしまった優万たちは、うなずくしかかった。

日が翳ってきて、もう帰らなければならぬ。

「じゃ、長居したし、そろそろ帰るな」

堀が、優万と香菜が黙ったのを見て、「もう質問がなくなったからだ」と考えて口にする。

それを聞いて、亮介はあからさまにホッとした顔をし、天真爛漫

な緋凰は外を見て呟いた。

「あら、もうこんな時間？　お夕飯の用意を手伝わなきゃ」

「お手伝い？　緋凰さんが？」

深窓の令嬢然した緋凰がそんな生活感溢れる発言をすると思わずに、間抜けな声を上げてしまった。

緋凰はにつこり笑う。

「働かざるもの食うべからず。私は居候だもの。当然よ」

「居候って」

亮介が反論しかけるのを、緋凰は制止する。

「あら、違う？」

「……いや、違うない……」

「じゃ、送るわね」

緋凰が立ち上がるのを見て、四人も慌てて立ち上がる。緋凰を先頭に、玄関へと向かう。

広い廊下で、優万は、ようやく亮介と二人で話す事ができた。

「……あの、ごめんね？　押しかけちゃって」

「……」

亮介は無言だ。やはり、良くは思っていなかったか、と優万は暗くなる。しかし、負けずに再び声をかける。

「で、でも、鳥羽君のお家って、本当にお金持ちだったんだね」

「は？」

亮介は、目を丸くして優万の顔を見た。優万は驚く。

「え、お金持ち、だよな？　こんな大きな家に住んでるんだもん」

「家が大きいだけだ。金持ちなわけじゃない」

「そうなの？　家の中だって、すごく立派だし」

優万は、周囲に目をやって言う。ちらりと見えた座敷の床の間の青磁の花瓶は、優万から見てもいかにも高価な骨董品だ。

しかし、亮介にとっては大したものではないらしい。一瞥もくれなかった。

「家が古いから、そりゃ、年代物もあるが…それだけだ。高価なものばかり普段から使っているわけじゃない」

「…そうなんだ」

優万は、まだ釈然としないながらもうなずいた。

「あんまり、話したくないかもしれないんだけどさ、訊いていい？」

優万は、恐る恐る亮介を窺った。亮介は、優万の顔を見つめている。優万の言いたい事がわからないのだろう。

亮介に見つめられて、優万はだんだん頬が熱くなるように感じた。必死に胸を落ち着かせる。

「どうやって、探すの？ 絳四郎さんの事」

瞬間、亮介の顔がはつきりと強張った。

やはり触れてはいけない話題だったか、と優万は内心青くなったが、緋凰も亮介を振り返っていた。

「実は、私も聞きたかったの」

「亮介、あなたはどうかやって絳四郎を探すつもりなの？」

優万は、勢いよく緋凰を振り返った。

「えっ！？ 緋凰さんも知らないんですか！？」

「そうよ。『何とかなる』の一点張りだもの」

ねえ、と緋凰は妙に意地悪そうに亮介を見た。亮介は、黙ったまままだ。

「手掛かりないの？」

優万が訊くと、亮介はなんとも言えないような顔をして緋凰を見た。

「この辺りにある古い屋敷が怪しい。鳥羽家名義の屋敷だけでも相当数ある。一つ一つ探すのはさすがに骨だろう。…緋凰が何か思い出してくれるといいんだが」

そう言つて、今度は亮介が緋凰を振り返る。しかし、緋凰はしれっとしていた。

「そんな大昔の事、忘れてしまったわ」

「この調子だ」

亮介は、優万に少し笑いかけた。それだけで、優万の心臓の鼓動が跳ね上がる。

「だって、この辺りもすっかり変わってしまったんだもの」

「でも、緋凰だけが頼りなんだ」

「それは…そうかもしれないわね」

二人のやり取りを見ながら、優万は、最大の勇気を振り絞って提案した。

「じゃあ…私もお手伝いするよ…！」

「は？」

「え？」

ポカンとする二人に、優万は必死に言った。

「に、人数は、多い方がいいじゃない。それに、鳥羽絳四郎って人を探したらいいんでしょ？ 聞き込みとかだったら、私でもお手伝いできるよ」

それまで優万たちのやり取りを黙って聞いていた香菜が優万に向かってガッツポーズをしてみせる。

優万自身、こんな事を申し出る勇気が自分にあつた事が意外だった。

亮介は、一瞬、緋凰と顔を見合わせた。

「…悪いけど…。他人を巻き込むわけにはいかない」

「だけど」

言い募ろうとする優万を、やんわりと緋凰が押し留めた。

「気持ちはとても嬉しいわ。でも、私たちでなければ見つけれられないの」

緋凰の言葉は、優万を困惑させるものだった。

「見つけれないって、一体」

「とにかく！ これは俺たちの問題だ」

これ以上口を突っ込まないでくれ。

亮介にそう言われてしまうと、優万にはもう何も言えなかった。  
「わかった…」

渋々うなずくと、亮介はあからさまにホッとした顔をした。それが、優万の気に障る。

確かに、他人の家の事情に首を突っ込んでいるのは、余計なお節介だろう。迷惑なのもわかる。

しかし、こうまで極端に他人を排除しようとする意味があるのだろうか。

秘密があると言っているものだ。

香菜ではないが、秘密にされると暴きたくなくなってしまうのが人情。優万はすでに、秘密を探ろうと心に決めていた。

## 第四話 その1

「それは、やっぱり探るしかないね！」

香菜<sup>かな</sup>が意を得たりと叫んだ。

「だよね」

「あんなにあからさまに秘密にされたら、探ってくれって言ってるモンじゃん！」

次の日。

いつも通り、部活の昼休みに暑い教室でお弁当を食べながら話題になったのは、当然の事ながら、昨日の亮介<sup>りょうすけ</sup>と緋凰<sup>ひおう</sup>の事だった。

香菜は、優万<sup>ゆま</sup>の方へと身を乗り出して、言う。

「鳥羽<sup>とば</sup>って、そこらへん抜けてるよね」

「どういう事？」

首をかしげる優万に、香菜はフォークを卵焼きぶつ刺した。

「だってそうじゃん。秘密にしたいなら、何にも言わなければ済む話でしょ。わざわざ『言えない』とか『訊くな』って言っちゃうなんて、秘密だってこっちに教えてるようなものじゃん！」

「確かに……」

優万もうなずく。

家にすんなり招き入れてくれたり、『秘密である』事を教えてくれたり、香菜でなくとも亮介は抜けているとを感じるだろう。

だから香菜は、亮介を蔑んでいるわけでもなく、純粹に亮介や緋凰の言動に疑問を持っているだけだった。それがわかっていいるから、優万も同じく首をかしげるのだ。

「でも、計算はしてないと思うよ」

「え？」

優万は昨日の亮介の様子を思い出す。

「鳥羽君は、正直に話してくれたんだと思うよ。私たちに『教えられない』って事を含めて」

「それって…」

「鳥羽君って、意外に正直だね。もつと秘密主義な人かと思ってた」

優万がにこにこしながら言う言葉に、香菜は脱力しながら答える。

「正直って言うより、生真面目すぎるんじゃない？」

「生真面目？」

香菜は、なぜか呆れているようだった。

「訊かれた事は全部答えなきゃって思ってるって事でしょ。誤魔化す事も、嘔吐く事もしようと思えばできたのに、しなかったしね。」

「ま、鳥羽っていかにも嘔吐くの下手そうだけどね」

「…それって、鳥羽君の事貶してるの？」

「別に？ 正直に言っただけだよ」

優万が半眼で呟くのに、香菜はあっけらかんと答えた。優万も、そうだろうなと思う。

正直なのは美点だが、それが過ぎれば逆に嫌味に聞こえるし、嘘に思える。亮介の場合は、完全に後者だった。

つまるところ、優万は、亮介が器用貧乏に思えて仕方がないのだ。上手く立ち回ろうとすればいくらでもできるほど頭が良いのに、敢えて事が面倒になる方へと進んでいってしまう。因果な性格だ。

しかし、優万にとっては、それすら好ましい。

「ちよつと優っちゃーん？ 勝手に鳥羽に心飛ばさないでくれる？」

にやにやししながら、香菜が顔を覗き込んでくる。優万は、ハッと我に返った。

「香菜ちゃん！ な、何言ってるの。そんな事」

「顔が赤いよ、優っちゃん。凶星でしょ」

香菜は、依然としてにやにやしたまま優万を見つめる。

もちろん凶星の優万は、反論できずに話題を変えるしかなかった。

「でさ、ちよつと手伝ってほしいんだけど」

「鳥羽の秘密を探るのを？」

香菜の言葉に、優万は首を振った。



「うっん。鳥羽絳四郎さんを探すのを」

「はあ!？」

大きな声を上げる香菜。

当然だろうな、と優万は思う。亮介と緋凰の秘密を絳四郎と結びつける発想は、意外に思い付かない。

「なんで!？」

「考えてみて」

弁当箱を片付けながら香菜をチラリと上目遣いに見る。香菜は、やはり訳がわからないという顔をしていた。

優万は、しっかりと香菜の顔を見た。

「二人が一番秘密にしてたところってどこだと思っ？」

「……………あ」

香菜も、ようやく思い至ったというように、長い熟考の末にハツとした顔をした。

鳥羽家の事や緋凰の素性を訊いた時も歯切れは悪かったし嘘っぽかったが、何よりも「言えない」「訊くな」と言われたのは鳥羽絳四郎だった。

「それで二人の秘密がわかるのかはわからない。でも、鳥羽絳四郎うはひしやうじろうって人が鍵を握ってる気がする」

「うっん。…そうかもね」

香菜も、認めざるを得なかった。

「でも、どうやって？」

「問題はそこなんだよね…」

優万は、腕組みをして考え込んだ。

昨日は、亮介に偉そうな事を言ってしまったが、いざ自分も探すと思うと、困ってしまう。相手は、名前しかわからないのだ。まだ亮介たちの方が持っている情報が多い分、探しようがある。

「もうちょっと聞き出しておくんだった…」

優万は、大きなため息を吐いた。

ふと、香菜が思い出したように呟く。

「緋凰さんの彼氏って事は、緋凰さんと同じくらいの年かな？」

「あつ…そうかも！」

「で、確か鳥羽が『この町にいる事は間違いない』って言ってたよ  
うな気がする」

香菜の続ける言葉に、優万はこくこくとうなずく。「後、いると  
したら、鳥羽家の持つてる屋敷だとも」

「でも、それってどれかわかんないよね」

「まあね」

香菜は苦笑いをしてみせた。

思ったよりも手掛かりはあるかもしれない。

しかし、それだけでは探せないのも事実。

何か一つでも大きな手掛かりがあれば良いのだが。

「やっぱり無理なのかなあ…」

机に突っ伏して、優万は呟いた。

チラリと助けを求めるように香菜を見たが、彼女の顔も晴れな  
かった。香菜もどうしたら探せるのか思い付かないのだろう。

「そつだねえ…」

そもそもが、名前も顔も素性も知らない人間を探すと言うのが無  
理な話だったのだ。

警察や探偵など、その道（どの道だか）のプロならともかく、た  
だの女子高生の優万が人を探せるわけがない。闇雲に探して、万が  
一の奇跡でもない限り、見つけれないだろう。

そう考えると、優万は急に怒りが湧いてきて、ガバツと起き上  
がった。

「ゆ、優っちゃん？」

怖い顔をしているのかもしれない。香菜がびっくりした顔で優万  
を見つめている。

大体、秘密にする亮介が悪いのだ。だから、気になって気になっ  
てしかなくなる。探すと言うのなら、最初から要らない情報を与え  
るなというものだ。

「香菜ちゃん、私、何か腹立ってきた…」

「え」

「何でこんなに情報のない人を探さなきゃならないの!? 鳥羽君も鳥羽君だよ。せっかく私が一緒に探そうかって言ったのに、要らないって言うし。そのくせ、自分もどうやって探そうか困ってるんじゃない! 私にも、もう少し情報くれたって良かったのに…」

最初は大きかった優万の文句は、だんだん小さくなってやがて口の中でブツブツ言うだけになっていった。

鳥羽に怒っているというよりも、情報を全くくれなかったという事に不満と悲しさを覚えたと言うのが正しいかもしれない。

それがわかったからだろう。香菜も、最初こそ驚いたものの、すぐに目を細めた。

「……優っちゃん、もしかして、拗ねてる?」

「えっ!?!」

優万は、はつと香菜の顔を見た。

「ええっ!?!」

「拗ねてんじゃない! それ」

「拗ねてないっ」

香菜は呆れたようだった。

「凶星刺されたからって逆ギレしないの」

優万はムスツと口を尖らせた。まだ亮介に対する怒りが消えたわけではない。しかし、はつきりと香菜に指摘された事で怒りは違う方向へシフトした。

「…もう良い」

「ん?」

優万は、何かが吹っ切れたように言った。

「とりあえず、鳥羽絳四郎さんを探す!」

「どうやって?」

間髪入れずに訊かれて、優万は「うっ」と言葉を詰まらせたが、すぐに答える。

「そ、そんなの…なんだっていいでしょ」

優万は、痛いところを突かれてしどろもどろになる。

「よくないよー。気になるもん」

香菜は、にやにや笑っている。優万をからかっているのだ。

「……とりあえず、頑張るの」

「だから、どうやって？ 私、方法を訊いてるの」

「それは…とにかく、頑張るの！」

要領を得ない優万の返答を予想していた香菜は、大きくため息を吐いた。

「何にも考えずに手当たり次第に探すつもりなのね？」

「う…」

詰まる優万。香菜は意地悪く続ける。

「それって、優ちゃんやんが鳥羽にダメ出した方法じゃなかったっけ？」

「うう…」

更に唸る優万。香菜をキツと睨み付ける。

「じゃあ、香菜ちゃん、何か良い方法思いつくの？」

「ううん」

香菜はあっけなく首を振る。

「だったら意地悪な事言わないでよ。効率悪くても、こつするしかないんだから」

「そうだね」

香菜は何か考えながら答える。何か感じたらしいが、具体的に形にならないようだ。

「ああもう、何でもこんな事になったの…？」

「嘆かない嘆かない。自分で鳥羽の秘密を探るんだって決めたんでしょ」

頂垂れる優万に、香菜がおかしそうに言い返す。優万は、反論できずに机の上に突っ伏すしかなかった。

香菜はクスクス笑っている。

「… あつ、もう休み終わりだよ。音楽室戻んなきゃ」

香菜の声に、優万も慌てて教室の時計を仰ぎ見た。

一時五分钟前だ。

優万も慌てて弁当の入った鞆をつかんで立ち上がった。

「早く行かなきゃ先輩に怒られるね」

「そだね。流石にピリピリしてるしね」

学園祭まではまだ余裕がある。しかし、そろそろ合唱として完成度を高めないといけない時期になっていた。

先輩方からすると、今年は出来が悪いらしい。早く早くと焦るの  
は理解できた。そんな先輩方の機嫌を損ねたくない。

特に、高校生活最後のコンサートとなれば、尚更だ。

「香菜ちゃん、アルトはどう？」

「どうもこうも。必死さが足りないね、一年の。やればできるはず  
なんだけど、まだ余裕があるって思ってた手を抜いてるのがバレバレ。  
そろそろ先輩の喝が入るんじゃないの」

香菜は、肩を竦めて言う。

「ソプラノもそう。でも、ソプラノの方がアルトより悪いかも」

「えっ、何で？」

優万の言葉に、香菜は意外そうに聞き返す。練習を聞いている分  
には問題ないように聞こえるからだ。

優万は、香菜がやったのと同じように肩を竦めた。

「だって、ソプラノの方は、練習もあんまり進んでないもん」

「あつ、そっか…。難しいんだっけ」

香菜の言葉にうなずいて、優万は軽くハミングしてみせる。

「ここね。なかなか難しいんだ、メロディが単調すぎて。逆に音が  
取りにくいの」

「それなら、まだアルトの方が音取りやすいかも」

同意する香菜に、「でしょ」と優万は大きくうなずく。

「主旋律なのに、何でこんなに変化のないメロディなの!？」

憤慨して、優万は言うが、先輩にぎろりと睨まれて慌てて声を落

とした。

「とにかく、音取るのが難しくつてさ…」

「…何にせよ、お互い頑張るしかないね」

香菜も、先輩の耳を憚って低い声で返答する。優万はうなずいた。

「そうだね」

「午後の練習始めるよ！」

優万が言うのと同時に、部長の声が音楽室に響き渡り、二人はそれぞれのパートへと別れた。

――

じゃあね、と香菜と別れた後、優万は鳥ヶ丘の辺りをフラフラ歩いていた。

有言実行。香菜に言った事を早速実践しているのだ。

ただし、ふらふら歩いているので、当然ながら鳥羽絳四郎の手がかりなど見つからない。

よく知った家の近所なら勝手がわかんと思ひ、優万は手始めに家の近所から探し始める事にした。

高校からの通学路ではなく、少し脇道にそれて進んでいく。

「ここら辺は変な家つてなかったはず…」

優万は、小さく呟きながら歩く。

時刻は黄昏。淡い橙色の空は、端の方がだんだん闇に染まって不思議なコントラストだ。早くも星が光っていたりする。

あまり時間がないために、優万は焦っていた。

午後の練習は白熱し、部活時間を大幅にオーバーしてしまったのだ。

おまけに、明日にはパートの中で歌唱テストがある。練習しなければ、自信がない。

主よ、憐れみたまえ。

ラテン語の厳かな旋律は、この今の時刻に不思議に似合った。

優万は、小さく鼻歌を歌いながら周囲を見回す。

和洋ごちゃ混ぜの大小様々な家が雑然と立ち並ぶ街。鳥ヶ丘のよ  
うに綺麗な街であるとは到底言えない。

あの街とこの街の違いはなんだろうと優万は思う。

家の大きさだろうか。道の広さだろうか。表面的なものもあるだけ  
ろう。

しかし、一番の大きな違いは、街自体が纏う雰囲気だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0321x/>

---

紅き翼の神～蓬莱戯談(ホウライギダン)

2011年10月14日00時04分発行